随想

回顧二十二年

〈「佐伯史談」の今日までとこれから〉

羽柴　弘

一、史談会発足のころ

わが佐伯史談会の発足は、昭和三十三年三月十六日で、それは、鶴岡郷土史研究会の発足の日でもあった。変に思われるかも知れないが、実は張本人は鶴岡の、泉・広瀬・高野（いずれもすでに故人）の三人、外にも何人か加ったが、現存の人はほんの二三人——。会場は龍護寺であった。

市内から柴田勝実・土屋直乙・坂本真澄・山田平之丞（いずれも今は故人）、その他そうそうたる長老有志の方々、三、四十人もあったろうか。会則をきめたり、役員選挙をしたり、すべて鶴岡の連中でとり進めたので、「佐伯史談会」を名乗り、会長に柴田老を推し、土屋先生が顧問、鶴岡の連中は評議員格に納まり、私が事務担当（故広瀬氏が幹事長という名で指名）となった。

この時のくわしい記録もどこかにあるが、手はじめに鶴岡の連中で挨拶状（城趾）に登ったが、すでに会費を集め「郷土史跡」とか「郷土史研究」とか題して機関誌とし、佐伯史談会の全会員にも配付し、実質的には、鶴岡側が牛耳っていた。

なにしろ柴田会長はからだが不自由であって、いろいろな会合に市内から参加されていたのは平田先生、佐脇氏ぐらい、時に小瀬氏（故人）が姿を見せたくらいであった。

当時は「佐伯史談会」と、「鶴岡郷土史研究会」と二枚の看板をかかげたことになるが、別にどうということもなく、私が幹事として会の万般の事務を担当した。

これが三年たち、五年たつうちに会員がふえ、研修行事も会の内輪でコツコツと積み重ね、昭和四十年ごろから、佐伯市内でも堅実に勉強をつづけている団体として注目されるようになった。

そのころには、もう「鶴岡郷土史研究会」の看板は収め、機関誌も「佐伯史談」と改め、忘れもせぬ昭和四十年の一月二日、新年初歩きを戸次に試み、長曾我部信親の墓にまいり、鶴ヶ城山下の成大寺跡をたずねたりした。今思えば、それはわが史談会のターニングポイントであり、「佐伯史談」の第一号の出たのがその二月、今から十五年前のことである。

二、佐伯史談一二一号の実績

そんな次第で「佐伯史談」はすっきりした姿で、一号から百二十号まで出して、今こゝに謄写印刷最終号を出そうとして原紙きりに励んでいる。これが完了し年内に発行出来ると、今年度（一月—十二月）は、次のように五回発行という好成績である。

第一一七号　二月二十四日発行
第一一八号　五月九日発行
第一一九号　八月五日発行
第一二〇号　十月二十二日発行
第一二一号　十二月中旬発行予定

これは勿論私一人のせいではない。製本、封筒書き、仕分け、配達など十人ばかりの会員の協力があればこそである。

ところで、これで終るとなると、がり版ずりに名残りかのこる。

県下で、何十号以上謄写印刷を守りつづけた機関誌が、郷土史関係に限らず、文化団体に限らず、外にあろうか。

他の友好団体と会誌交換をする時には、正直なところ気がひけた。展示用に大分県立図書館に一部加えて送っているが、行って見るとみすぼらしい姿で、わが「佐伯史談」はデンとのさばっていた。しかし、私は卑屈を少しも感じなかった。

世の中には「一目惚れ」という言葉があって、いろいろな方面で使われている。およそわが「佐伯史談」は、その逆の「一目嫌い」にふさわしい姿である。しかし私はついぞ本気に恥かしいなど思ったことはない。それはなぜだろう。

私は、確信をもって言える。「佐伯史談」は、歴史とふるさとへの愛情ゆたかな人達が、すなおな気持で集まり、互いに敬愛しつつ協力しつつ、十五年の蓄積である。気どるところもなく、てらうことなく、謙虚に学んだことを他の会員に、「ご参考にでもなさってほしい」とご贈呈う、まことに素朴な機関誌であった。だからそれは体系のない、前進・向上・統一のない、単なる羅列、雑宜収にすぎなかったのではないか。そんな反省はしている。このふりかえりは今後ずっと続くだろう。

三、活字印刷への期待

機関誌「佐伯史談」は、来年からいよいよ活字印刷にふみ切る。この十二月に行われる評議員会にかけて承認されるが、「賽はすでに投ぜられた」ので為る。それはかなりの苦労と経費の上での苦難が予感される。その対策については、信頼と協力をもって、会員みんなでかちとっていかなくてはならない。

それはそれで、私どもの前途に道一ぱい立ちはだかっている。よけて通れない問題である。五百の会員みんなの、物心両面からの協力がなくては、行く手の難関に達することは出来ない。これは新年度早々からの史談会の課題である。

ここらで私がなぜこのような決意をし、会長はじめ役員会に訴え、背水の陣のような形で会員皆さんの了解を得ようとするのか。その理由・事情のおもな点を申し上げると、凡そ次の五項でご理解を乞いたい。

第一は、こうして鉄筆で原紙をきる作業が、無理になったこと。目のつかれがひどく、字画が前のように正確に書けなくなったこと。

第二、一枚一枚手刷り、総枚数約九千五百枚の大量には、これ以上体力的に無理。

第三に、原紙きりに約五十時間、印刷に約四十時間を要することは、体力的のみでなく、その時間がせり出せなくなって来た。（来年は、引受けている仕事をまとめねばならない）

それに、もうこの辺で写真でも何でもきれいに載せられる、すっきりした活字印刷に切りかえたい。そしてはじめに書いたように、古い「佐伯史談」とかなぐり捨てて、百二十一号の次を受け、経足以来二十二年の実績の上に、堅実な郷土史研究誌を作ろうではないか。

しゃんとした表紙、標題の「佐伯史談」の文字も字態を変え、上質な用紙で写真効果のあがるように——。そのためには編集部組織も新設、五百会員が「我らの機関誌」として、日本中に胸を張って誇れるような——。

そんな「佐伯史談」としようではないか。

（昭和五十四年十一月二十七日　夜）